
ハートハート

星条有砂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハートハート

【Nコード】

N0575T

【作者名】

星条有砂

【あらすじ】

ボーカロイドの心のお話です。

心のない少年レンと、心優しい少女ミクが出会いレンに心とはなにかを教えていく。

本当の強さ、優しさとはなにか。

2人は見つけることができるのか……？

序章（前書き）

完全に見切り発車です。

序章

あの日から何日くらいたっただろうか。

擦り切れた靴を引きずったまま、周りを木々に囲まれた道を歩く。

レンの目はうつろであった。感情がこもっていない視線は、正面ではないどこかをみつめていた。

捨てられた。

そんな漠然とした意識はあっても、ロボットであるレンが傷つく事は無かった。

20XX年、世界はある変革のときを迎えていた。

テクノロジーが進化し、人間と同じ情緒があるプログラムが開発した者がいた。

カイト・ブリタールと名乗るその者は、元来のロボット技術を打ち破るような

技を見せた。しかしそのあまりにも人間に似ているため、ある噂が流れた。

それは、死んだ人間の遺体を使ってサイボーグを作っているという噂だ。

しかしそれはあくまで噂であって、実際には分からない。カイトの作るサイボーグは高値で取引されるようになった。

レンはカイトに作られたサイボーグだ。

金色の髪、整った顔、長い手足。カイトの作ったサイボーグの中でも、1、2を争う

美形だ。本来ならば1億はくだらない値がつく代物だ。

しかし、レンは買い手に出せるような代物では無かった。

なぜなら、レンはカイトには絶対にあってはいけない失敗作だったのだ。

カイトの売りともいえる、情緒が無かったのだ。
カイトはレンを捨てた。自分の失敗を許せなかったのだろう。
そんなことはどうでもいい。今自由に行きたい所にいけるのだ。
しかも、あまりにも人間に似ているため、怪しまれることもない。
しかし、レンにはなにがしたいのか分からなかった。

「感情を手に入れる。そしたら、お前に存在意義をやってやる。」
それがカイトの別れ際の言葉だった。
なにをしていいのか分からないレンはそのままその言葉に従っている。

なんとか人が歩けそうな道を、足を引きずって歩く。
道からして、ここは昔小さな農村だったかもしれないが、今は見る影もない。
人のいる気配すらしない。

「人がいなければ、意味がない。」
レンがきびすを返し、戻ろうとすると後ろから声が聞こえた。
「あの、足大丈夫ですか？」
後ろを振り向くと、緑の髪をした美しい少女が立っていた。
人間がいた。

「あの……」
戸惑い気味の少女にレンは声をかける

「あなたは、人間か？」

一瞬少女は戸惑ったが、すぐに納得した顔をした。

「ああ、私はサイボーグではないですよ。人間です。」
それに、と少女は少し笑った。

「こんな辺鄙な村じゃ、サイボーグなんて一体も来ませんよ。」
やっと会えた、人間に。

この人なら教えてくれるだろうか、感情がなんなのかを。

レンは少女に近づき、しゃがんで片足をついた。

「私はサイボーグです。あなたの彼氏にも夫にも兄弟にも友達にも、親にすらなれません。」

どうか、あなたの近くにいらせてください。」

少女はレンを慌てて立たせた。

「そんなことしないでください。」

やっぱり駄目か……。

レンは半ば諦めモードに入っていた。

「……友達になってもらえますか？家には空き部屋もありますし。」

どうですか？」

「え！？いいですか？」

「ええ。それに敬語もなしにしましょう。あと、自分のことは「俺」か「僕」にしたら？」

少女は少し赤くなっていた。

少し胸がもやもやするが、なんなのか分からない。

「私はミクっていうの。あなたは？」

「わ……俺はレン。」

ミクはレンの手を取って森の奥に進んでいった。

序章（後書き）

ありがとうございました

家

レンとミクはある小屋の前で立ち止まっていた。

正直、テクノロジーとはいえ、1人の男と生活を共にするのに抵抗が無かったと言えば嘘になる。

それでも、レンをこのままほっとけたり、今の状況が嫌かというとそうでもない。なんなんだろう。

ミクは片割れに立つレンを眺めた。無表情そうに見えて、でも微かに興奮の入り混じった表情をみせていた。なぜか笑いがもれる。

感情が無いとはいえ、何も感じないというわけではないのだろうか・
まだ何もわからない。

ミクは小屋のドアを開けた。
中は意外に広く、山小屋を思わせる家具が置いている。

そのままミクは廊下を進み、行き止まりの所に2つ並んでる部屋の、右側の部屋を指差した。

「こつちがあなたの部屋だよ。
元はお父さんの部屋だけど、気にしないで使って。」

いやいやすつげえ気にするよ。

と普通の男なら心の中でつぶやく
だろうが、機械であるレンには
そんな感情は皆無である。

「分かった。」

レンが部屋に入ると、身体中のセンサー
が反応した。

「前の住居者の臭いを感知しました。

この特徴ある臭いは、多くの老人に見られて、

その臭いを発する者は、家族から

遠巻きに避けられるという、加齢しゅ・・・」

「ばか！そんなズバズバと言わないで。傷つく
から」

そう言つてミクはレンの頭をポンと叩いた。

「・・・すみません・・・??」

レンは詫びの言葉を口にしたが、
なぜ怒られたのかは分かっていない様だ。

「これから村に行こうと思つけど、
どうする？」

こんな人気のない所に集落がある

とは思えないが、興味はある。

「行く。」

二人は集落に向かって歩きだした。

集落

辺鄙な村だからか、住民は思っていた以上に少なかった。三十人いくだろうか。

「レン、こちらはルカさんよ。」

ミクはルカをレンに紹介した。

ピンクの髪を腰まで伸ばした女性は朗らかに笑った。

「レン君ね。どうも初めまして。」

「こ、こちらこそ。」

ミクはルカに事情を説明した。

「あなたは本当にお節介焼きね。」

「いいじゃん別に！・・・それよりレンの洋服買いたいんだけど。」

ミクのその言葉からルカの家が服屋だと理解できた。そして会話からふたりの親密度も推測できた。

「それとも彼だから放っておけなかったのかしら？」

ルカはそういいながらレンに意味ありげな視線を送った。

ボンという音とともにミクの頭から湯気が上がる。

「ちよつと、ルカー。」

ミクは顔を真っ赤にしてルカに抗議の声をあげる。

ルカの意味ありげな視線もミクの真っ赤な顔もイマイチ理由がよく分からなかったが、

自然と笑いがこぼれた。

「あ、レンが笑った。」

ミクの言葉に笑いが止まる。

え！？今笑ってた。俺。

ミクが満面の笑みでレンの手をとった。

「レン、それが笑顔なんだよ。おかしいっていう感情なんだよ。」

レンはミクの笑顔に引き込まれるような気がして、慌てて顔をそらした。

ミクはレンの行動に眉を顰めて、レンの顔を覗き込んだ。

「レン？嬉しくないの？」

「嬉しいよ嬉しいけど、顔が暑いんだ。」

ルカはその会話を聞いて、吹き出した。

「ミク、レン君は照れているのよ。．．．好い加減手を離してあげなさい。」

「手．．？」

ミクは自分の手を見て真っ赤になった。

ゴメンと言って手を離した。

無意識だったのか。

ルカはまたわらった。

まさか、あなたがここに流れ着くとは思わなかったわ。

カイト様はこれを予想していたのかしら。

ルカはサイボーグ特有の真顔で考えていた。

笑顔

レンの足の治療をしながら、ミクは静かにレンを盗み見た。

端正な顔は何を考えているか分からない。

痛みは感じるのか、時々顔を歪ませている。

「そろそろいいかしら??」

ミク、見過ぎなんじゃない??」

ルカはからかったようにミクを見つめる。

気づかれてた。

顔の体温が一気に上がる。

「なにをですか??」

レンはルカに問いかける。

「ふふ、それはねえ・・・」

「きゃー！！！！言わなくていいから

そんなこと!!」

ミクはルカに飛びかかる。

この際首の骨折つてもやむなし!

「今物騒なこと考えたでしょ。」

「うーん?何の事かな?」

「笑顔が怖いわよ!!」

終始ミクとルカの取っ組み合いを見ていたレンだったが、耐えきれず吹き出した。

「笑わないでよー!! 恥ずかしくなるじゃない!!」

でも、笑ってくれて良かった。

「仲が良いんだなって。」

ルカは呆れたようにため息をついた。

「ただの腐れ縁よ!

そんな事より、二人で暮らして行くんでしょ？」

顔がまた火照っているのを感じた。

「そうだけど、なによ。」

ルカはニヤニヤしながら、レンを呼び寄せ

た。そのまま肩を組んで、ミクに背を向ける。

「ミクを女にしてあげて。」

「え!?!?」

レンは顔を真っ赤にしながら固まった。

あなたなら、きっと任せられる。

私の大親友を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0575t/>

ハートハート

2011年10月8日23時55分発行